

「デジタル地図帳」を用いたアクティブ・ラーニング型地誌学習の実践

高等学校地理 A「オーストラリアの地誌」を例に

Lesson Report of Active learning, using with “Digital Atlas”

The case of “Geography of Australia “, on geography A for high school.

伊藤 智章（静岡県立裾野高等学校）

Tomoaki Ito (Susono high school Shizuoka pref.

キーワード：デジタル地図帳・アクティブラーニング・地理総合・マッシュアップ

Key Word : Digital Atlas ・ Active learning ・ Geography general ・ mash up

1. 問題の所在

高等学校の新必修科目「地理総合」が2022年度から実施される。講義式の知識伝達型の授業から、「アクティブ・ラーニング」（文科省は「対話的・主体的で深い学び」と定義）を旗印にした新しい学習指導要領下での新必修科目の実施に向けて、新たな教材の蓄積や指導方法の改善が迫られている。

ただ、伊藤（2017）が指摘したように、新しい指導スタイルに対する現場教員（特に地理を専門としてきた教員）の抵抗は根強い。GISの利用も含めて、現場教員の忌避感を取り去ること、新たに迎えるノンプロパー教員でも使いやすい教材やノウハウを確立して普及させる事は、教員、研究者、教科書会社等、すべての地理教育関係者が新必修科目の実施までに実現しなければならない仕事である。

2. 教材および授業の概要

報告者は、位置情報を付与した地図画像を、タブレットコンピューターの画面上で現在位置を示し、写真や新聞記事などの映像資料を地図上に展開することが出来る教材を「デジタル地図帳」と名付けて教育実践を行って来た（伊藤：2016など）。これまで、地形図やハザードマップなど、小縮尺の地図を取り込み、現地調査と組み合わせた学習を展開してきたが、今回は、地理 A の世界地誌の学習において、大陸スケールの地図を使い、グループ学習の補助教材として利用した。

授業は50分である。生徒（高校3年生、40名）は、4～5人ずつの班を作り、テーブル毎にオース

トラリア大陸の白地図（模造紙大）を囲んで座る。一人一台のタブレットには、約20種類のオーストラリアの主題図や衛星写真を搭載し、一部の地図には写真を埋め込んでいる。生徒達は、任意の地図を選んで地図の内容（例えば年間降水量線、アボリジニの居住域、小麦の生産地、鉱山の分布など）をマッシュアップさせた上で、データ同士の関係性に注意して主題図を作り、各班で発表した。

3. 課題と展望

生徒達は限られた時間の中で効率よく作業を進めることができ、興味関心を飛躍的に高めることができた。教師の指示に合わせて紙媒体で確認する形の資料活用から、より多くの資料を生徒が主体的に選び、組み合わせる形は、「アクティブ・ラーニング」的な学習ができたといえる。ただ、教材準備の煩雑さや専門的な技術が必要な点で、教材の汎用性には課題が残っている。今後、教材の製作者や教育団体等が分担して、二次利用を前提とした地図や写真資料の作成や公開を進めて行くことが求められる。

【文献】

伊藤 智章（2017）「必修化に向けた高校地理の改革—現場の実践と地理学教室への期待」, 立命館地理学 29, pp. 11-19.

伊藤 智章（2016）「伊藤 智章（2016）「タブレットコンピューターを用いた『デジタル地図帳』システムの構築—沖縄修学旅行の研修教材の製作を中心に—」, e-journal Geo 11 (2), pp. 516-525.